

② 「名詞」における待遇表現

小林 美恵子

はじめに

昨年、女性の談話に現れる「名詞」における待遇表現として調査したのは次にあげるような項目であった。まずこの調査のおおよその結果を確認しておく。

(1) 「お」「ご」のつく普通名詞について

年代的には30代に「お」「ご」の使用が少なく60～70代に多い。また職業分野では、スポーツ・映画製作などの関係者に少なく、芸能関係者にやや多い。TVのインタビューという談話の性質上、視聴者・世間一般・自分の仕事とかかわりのある人々など「一般不特定の人々」に対する尊敬の意をこめた「お」「ご」の使用が全体に目立った。また年代にかかわらず、「お話」「おつきあい」「お芝居」「お仕事」「お友達」など「お」をつけて用いられることが多い語がある。これらに「お」をつけて用いる傾向は芸能関係者に特に強く、「お仕事」などは、他の分野の人々が「お」をつけて用いていないことから、あきらかにこの分野の人々の職業意識からくるものではないかと結論した。

(2) 人をあらわすことば

① 家族をあらわすことば

② 「父」「母」をあらわすことば

ほとんどの話者は自分の両親について「父」「母」と言っているが、特異な例として、必ず「父親」「母親」と「親」をつける作家(30代)と、役者として有名な父を「お父さん」母を「お母さん」と呼ぶ女優(30代)、またこれに類するものとして祖母を「おばあちゃん」と呼んでいる例が見られた。(講談師・20代)前者を、父母を自分が属する特定の存在としてでなく、「親」として客観化・概念化してみようとする意識によるもの、後者を一種の親愛表現によるものと見た。但し、この親愛表現も、自分に親しい存在として父母・祖母を概念化し、一歩退

いたところから見ているがゆえの呼び方と見ることもできるだろう。

⑤ 「夫」をあらわすことば

女性ゲスト22名中8名が夫について語っているが20～50代の5名は「主人」という呼び方を用いず「夫」「彼」などと呼んでいる。インタビュアーからの呼びかけが例外なく「ご主人」であること。「主人・夫」「主人・彼」のような併用の例はないことからこの語選びが意識的に行われていることがわかる。おもしろいのは「夫」「彼」と称する人各々のそれらの語の使用回数が「主人」を用いる人のそれに比べると概して少ないことである。これは「主人」を使いたくない人の夫を話題にのせること自体へのこだわりとも見え興味深い。

② 家族以外に用いる親族呼称

家族・親族以外の人を親族呼称を使ってあらわした例は全部で10例ある。「おばあさん」「おばあちゃん」「おばさん」「おばはん」「おじさん」「お母さん」「お姉さん」がその全ての語例であるが、圧倒的に女性を指す語が多く、中でも「おばあちゃん(さん)」が4例と目立つ。親しみの表現であるとともに、一種の蔑称としての意味があることは既に指摘されているとおりでである。老人を表す語としては、他に「老人の方」「お年寄り」「年寄り」「ご年配の方」などが見られた。

③ 「～さん」「～さま」

④ 「みなさん」「お客さん」「お子さん」

- 自分を含まない他者を指す場合「みなさん」はもっとも一般的だが、高校生以下の子供や、学校時代の友達関係などをいう場合には「みんな」が用いられる傾向がある。
- 「お客」に関しては「お客さん」よりは「お客さま」の形で用いられることが多い。この調査においてあらわれた「お客さま(さん)」はすべて芸能関係者から観客を指した例であるが「みなさん」の場合、自分の芝居の観客や読者を指す場合も「みなさま」とはならないから、これは語としての特性であると考えた。
- 一部に「お子さん」「子供さん」と用いた例が見られたが、一般的に子供については敬称「さん」をつけない方が圧倒的に多い。これは概念としての子供や

子供一般についてはもちろん、ある特定の子供を指す場合も同様である。なお「お子さん」「子供さん」「ぼうやちゃん」「お嬢さん」（小学生の少女を指して）など敬称をつけて用いられている例は、およそ50才以上の話者に限られているのも特徴的である。

⑥ 職業・役職をあらわす語につく「さん」

職業・役職名に「さん」がつくかどうかを決めているのは、話者の年代や職業またその個人的な意識よりも、職業・役職名であるといえる。「女優さん」「コックさん」「保母さん」「女工さん」のような例では、尊敬語的に他者をあらわす場合のみならず、一般概念としての職業名をあらわすような場合にも「さん」づけで用いられることが多い。「生徒」などは「生徒さん」という言い方も可能でもあるにもかかわらず「さん」をつけた例は全くみられない。またスポーツ関係者は「監督さん」と言わないが映画関係者は言う場合もある。というように職業分野によって同じ職業名でも違った形で定着しているという例も見られた。「ポジさん」「スクリプトさん」などある職業分野にのみ用いられる業界用語のようなものもある。

④ 自称代名詞「わたし」と「わたくし」

自称に「わたくし」を用いる傾向は年代が上がるにつれて強くなる。30代前半以下の話者の「わたくし」を用いているのは20代の1人だけである。また「わたくし」のみを用いて話す話者は30代後半～70代の3人で、他の人々は「わたし」「わたくし」を混えて用いている。「わたし」が女性の自称の本来的なものとしてあり、場に応じて「わたくし」を用いる意識は、年代が高くなってから後発的に現れてくるようだ。「わたくし」はいわゆる丁寧さをあらわすことばであり、旧来の女性のことばが丁寧であるべきだとされた価値観からいえば年代の高い人の方がより女性らしいことばを用いているということの1つのバロメーターともいえよう。なお、「わたし」と「わたくし」を混えて使っている話者についてその混え方の意識に共通する傾向は特に見られなかった。

さて、女性の談話に見られた以上のような特徴と比して男性の場合はどうかを本論では見ていくこととする。但しゲストの表に見られるように男性の場合、話者の

年代、職業には大きな片寄りがあり、男性の中の年代、職業差などを見ていくことはむずかしいだろう。おもに「男性」として一括して、女性の場合と比べていく。なお「女性の調査」としてあげたものについては、すべて昨年度の研究調査「女性の話しことば — テレビのインタビュー番組から —」のうち③「名詞における待遇表現」による。

(1) 「お」「ご」のつくことば

女性の場合と同様に「お」「ご」のつく普通名詞を次のように分類整理した。

- a 相手・特定の第三者や、その人のものへの尊敬をあらわす「お」「ご」
- b 不特定の人（世間の人、視聴者）などへの尊敬をあらわす「お」「ご」
- c 特定の他者に対する自分の行為やものにつけて謙譲の意をあらわす「お」「ご」
- d 不特定の人に対する自分の行為やものにつけて謙譲の意をあらわす「お」「ご」
- e 丁寧語
- f 美化語

「お客」「お嬢さん」のように人をあらわす語は含むが、「おとうさん」「おかあさん」のような親族名称は別に考える。引用された「お」「ご」は含まないなど、整理のしかたは、女性の場合と同様である。

次に男性の用いた「お」「ご」を一覧表にしてみた。（表1）

（表1） 各ケースに現れた「お」「ご」のつくことば

ケース	尊敬語		謙譲語		丁寧語	美化語
	a	b	c	d	e	f
K1	—	—	お礼	—	お金	—
K2	—	—	—	—	—	—
K3	—	—	—	—	お金(2)	—
K4	—	—	—	—	お客様	—
K5	ご愛用◆	ご要望	—	—	—	—

K 6	ご自身 ご調査	—	—	—	—	—
K 7	—	お年寄	—	—	—	おはこ
K 8	—	—	—	—	お金※	—
T 1	—	お客さん おかげさま	—	—	—	—
T 2	—	—	—	—	お人形	おばけ(2)
T 3	ご遺族 お墓 お坊様 お嬢さん お友達	—	ご挨拶 ご一緒(2)	—	お茶	—
T 4	—	お客さん(4)	—	—	お芝居(2)※	—
T 5	ご紹介	お話	—	—	お話※	ご飯
T 6	お寺(2)	—	—	—	—	—
T 7	—	—	—	—	お買物 お客 お客さん(2)	—
T 8	—	—	—	—	お風呂(3) お湯 お姫様 お城	—
T 9	—	—	—	—	お互い	—
T10	お隣り ご縁 お宅 お手伝い	—	お使い	—	おしり	—

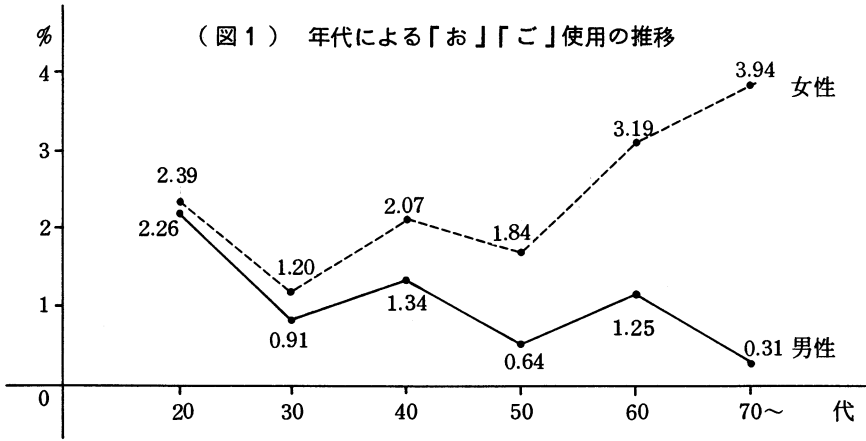
- (注) ・ ()内の数字は複数現れた場合の数
 ・ ※は、同一人が話中で「お」「ご」をつけずに用いた例がある語
 ・ ◆「ご愛用」は「自分が愛用する」ということについて言っている。
 冗談的に自分に向けた尊敬として整理した。

(表2) 年代別「お」「ご」の出現数(女性との比較)

年代	a	b	c	d	e	f	計	女性計
20代 (3人)	5	2	3	0	2	2	14/620 (2.26)	20/836 (2.39)
30代 (1)	0	0	1	0	1	0	2/220 (0.91)	31/2575 (1.20)
40代 (4)	3	5	0	0	3	1	12/893 (1.34)	4/193 (2.07)
50代 (3)	1	1	0	0	3	0	5/776 (0.64)	18/979 (1.84)
60代 (6)	6	1	1	0	8	1	17/1355 (1.25)	9/282 (3.19)
70代 (1)	0	0	0	0	1	0	1/319 (0.31)	17/431 (3.94)
計 (18)	15/4183 (0.36)	9/4183 (0.22)	5/4183 (0.12)	0/4183 (0.00)	18/4183 (0.43)	4/4183 (0.10)	男性 51/4183 (1.22)	女性 99/5296 (1.87)
女性計 (22)	13/5296 (0.25)	25/5296 (0.47)	2/5296 (0.03)	2/5296 (0.03)	49/5296 (0.93)	8/5296 (0.15)		

- (注) ・合計欄の分母は、各年代の話者の用いた普通名詞を含む文節の数であり、()内は、そのうち「お」「ご」のついた普通名詞を含む文節の%である。
- ・普通名詞を含む文節の総数は男性4183、女性5296、1人当りの平均は男性232.4、女性240.7であった。

(図 1) 年代による「お」「ご」使用の推移



「お」「ご」はどの世代においても、女性の方が男性に比して多く使用している。20代、30代では男女の差は小さいが、年代が上がるにつれ、その差が開いている。ことに60代以上においては、女性の方が「お」「ご」を用いることが圧倒的に多いことがわかる。「お」「ご」の使用を丁寧さの度合のバロメーターの1つと考えると、60代70代の女性は同世代の男性、また他の世代の男女と比して、もっとも丁寧なことば使いをしているといえる。

女性では多かった「一般不特定の人々」に対する尊敬の意をこめた「お」「ご」(b)は、男性においてはあまり目立たない。これは、「こだわり百科」の一部に電話インタビューがあること、また「徹子の部屋」がその名も示す通り、司会者の個性を強く打ち出して、司会者とゲストとの対話という性質の強いインタビューであることから、視聴者に対してという意識が、女性のインタビューに比べてやゝ稀薄であることによるのかと考えられる。

男性の場合、女性に比してめだつのは、むしろ特定の第三者に対する尊敬の、「お」「ご」(a)の使用である。とはいえ、実はこれはT3、T10の2人の話者によってその6割までが用いられている。特に20代の(a)はすべてT3の話者によるものである。この話者は、普通名詞文節241に対して9語の「お」「ご」のつく語を用いており(3.73%)男性全話者の中でも最も多く「お」「ご」を用いている。これらの「お」「ご」は、謙讓語(c)も含め、自分の起こした交通事故で亡くなった被害者やその遺族についての話題、アメリカ副大統領令嬢との親交を

語った話題に集中して現れる。T10の場合も俳優である話者が、若い駆け出しの時代に親交のあった先輩や知人について語っている部分に用いられている。いずれの場合も話者の性別、年代などよりは、話題の内容によって選ばれた「お」「ご」の使用といえる。

男性の場合も女性と同じく最も多く使用される「お」「ご」は丁寧語(e)であるが、全体の割合から見ると男性は女性ほどには丁寧語の「お」「ご」を使用していない。(b)とあわせこの(e)が、男女の使用頻度の差を生み出している部分である。女性の場合、特に「話」「つきあい」「芝居」「仕事」「友達」などの語について、自分自身に属する場合や、一般的な話題として語る場合にも「お」をつけた例が多く見られたが、男性にはそのような傾向はほとんど見られない。T5に1例「お話」があり、T4に2例の「お芝居」が現れる他は、「話」(5人10例)「芝居」(3人5例)「仕事」(5人8例)「友達」(2人2例)すべて「お」はつけられていない。その他に「お話」「お友達」と尊敬語として用いられたものが1例ずつあり(表1)、「つきあい」はことばそのものが出てこない。

T5の「お話」は、インタビュアーの紹介を受けて

(例1) 別の方のお話かって、今一瞬ねえ、ぼくのじゃないね、このお話はと思って

という文脈で現れる。文中先の「お話」は「別の方」という不特定他者への尊敬語と見る。後者の「お話」は、自分についての話だが、インタビュアーがした話という意味で、これを受けたと見れば尊敬語とも考えられる。この話者には別に

(例2) 途中まではほんともうほめられましてね、五重丸ぐらいの話なんですよ。

と「話」として用いている例もある。

T4は、大衆演劇の女形である俳優だが、「芝居」5例中、2例に「お」をつけている。

(例3) 子役んときやってましたから、どんなお芝居だったの聞くとわかりますから……

(例4) 『お笑い忠臣蔵』といってね、ほんとうは浅野さんというのはもうわがままな男で、吉良さんはいい人だったんじゃないかと、そういう逆にやっ

たお芝居なんです。非常に受けた芝居なんですがね。

いずれも1つの演し物の意味で用いているが、例2ではすぐ後に「芝居」ともいっている。また

(例5) 親子の縁切るぞっていうとこの芝居なんですけどね。

のように演目のある部分の演技を指したり、演ずることを指している場合には「お」をつけない。「芝居」や「仕事」に「お」をつけていうことは芸能関係者に多いと、女性の場合には言えたが、男性の場合、T5以外に新劇出身の俳優であるT9、T10が「芝居」という語を用いているが「お」はつけず、T10は「仕事」をくり返し3例用いているが、これにも「お」はついていない。T4の場合も「お」をつけるかどうかは、意味あいによって区別しているわけで、「お」をつけない方がむしろ普通の言い方であるようだ。

女性は男性に比して全般的に「お」「ご」の使用が多いといえるが、このように見ていくと、女性の中の高年齢層、芸能関係者というようにある特殊な層の「お」「ご」の多用が全体の数値をあげているともいえる。それ以外の年齢、職業層についていえば、男女の差はほとんどないといってよいのではないか。

(2) 人をあらわすことば

① 自分の家族をどういふか

(表3) 自分の家族をあらわすことば

ケース	年代	職域	両親	兄弟・姉妹	その他
K5	50	大学教授	母親(2)		
K7	60	芸能			ファミリー(2)
K8	80	著述			家内
T1	20	音楽	お母さん、親	弟	家の人
T2	20	スポーツ	父		
T4	40	演劇	おやじ、おふくろ(2)	兄貴(5)、彼	彼女(離婚した女性) うちの奴、せがれ
T5	40	放送	父親(2)、勝禰さん 母親	弟	
T6	40	出版	父親(2)		
T9	60	演劇	父、母		子供、お姫様 母親(子供にとっての) 母、別れた妻

女性の場合、多くの話者は両親を「父」「母」と呼び、その中で作家である30代のケースのみが、「父親」「母親」とあらわしているのが特徴的であった。(表3)を見ると、男性の場合、女性とはむしろ逆の傾向を示していることがわかる。「父」「母」と呼んでいるのはT2、T9のみで、両親(そのどちらか)に言及している8人のうち半数までが「父親」「母親」と言っている。これらの4人の話者はいずれも40代以上である。女性における調査で論及したように、「父」「母」が特定の存在を示す親族名称であり、「父親」「母親」が概念を示すより客観的なことばであるとするならば、男性の方が女性より概念的に親を扱っている傾向がある、といえそうだ。

(例6) わたくしの父親、その勝穂さんはですね、え一袋物職人なんですよ。

(中略) ですから千田家の団らんってのはご飯食べた後も父親と母親は手を動かしてる。(T5)

というような語り口は「千田家」と自分の家族をあらわしていることも含め、自分の両親についての思い出というよりは、客観的・描写的に自分の家族を題材としているような雰囲気さえみられる。

親をあらわす語で他に特異といえるのは、T2とT4であろう。T4は「おやじ」「おふくろ」「兄貴」を用いる。これは少なくともこのようなインタビューで普通の女性に用いられることは考えにくい男性特有の、しかもかなりくだけた表現である。妻に対する「うちの奴」息子に対する「せがれ」また後に述べる自称の「おれ」なども合わせ、大衆演劇の世界で活躍するこの話者特有のやゝ古風な闊達さの現れという感じがする。T2の家族のとらえ方もなかなか興味深い。髪を伸ばしたりバイクに乗っていた学生時代のことを、インタビュアーに「おうちでは、ご家族は」と問われ次のように答えている。

(例7) いや、あの家の人はすごい理解ある人で、髪の毛染めたりしても、あんまり怒らないっていうか、やることだけやってればっていう感じだったんですけど――。

両親を父母としてでなく「親」として一括してあらわしたり、さらにこの例のように「家の人」として一般化してしまうことはことに最近の若い人、例えば高校生の談話などに目立つように思う。自らを両親から独立した存在として意識した

い気持の現れとして、このような一般化が現れるのだろう。一方で、

(例8) たまになんかお客さんとか、お母さんの友達とか来てると(ドラムの練習を)「やめてくれない」ぐらいで……。

というような言い方も見られ、そのアンバランスは「お母さん」が女性の場合にも見られたような自分に親しい存在であるという面から概念化する、というより、話者が母親に密着した幼い子供としての存在であることを感じさせないでもない。これから意識的にのがれようとする「突っ張り」がいわば「家の人」という言い方なのであろう。

ところで(表3)に見られるように、男性の場合、自分の妻や子供を話題としている例は、非常に少ない。K8が妻に、T4、T5が妻と子に言及しているが、T4、T5はいずれも「妻」は離婚した女性のことで厳密な意味では妻ではない。これらの3例は「家内」「彼女」「うちの奴」「母親(子供にとって)」と違った呼びわけをしているが、これをもって男性から妻への呼び方は多様であると結論づけることは難しい。女性の場合、独身の人も含め22名の話者のうち8名までが夫に言及していた。これらはもちろん、ほとんどの場合インタビューから話題が提起される。今回男性について調査した2番組、前回女性について調査した番組は、テーマとするところもインタビューも違うわけであるから、話者の性差のみを問題として配偶者について語ることの多少を云々することはできない。ただ女性が何らかの仕事をする場合、その裏での夫のかかわり方、本人の夫や子供へのかかわり方が問題にされがちであり、男性の場合はそうではない——妻と別れたというような事情があると問題にされることもある——という社会の見方がこのようなインタビューの話題選びにも反映しているとは考えられる。

なおT9に自分の娘を「お姫様」とあらわした例があるが、これはインタビューが「お姫様みたいな子だったんだけど、お姫様の方はどんなになったんですか、その後」と問いかけたのに対して

(例9) お姫様はね、も、スポーツやってんですよ。

とうけたものであり、インタビューの言葉に触発されたユーモラスな言い方といえよう。

② 家族以外に用いる親族呼称

(表4) 一般名称として用いられた親族呼称

ケース	年代	職域	
K 1	30	旅行	おばあさん、おばさん(2)
K 7	60	芸能	お父ちゃん・お母ちゃん、おじいちゃん・おばあちゃん
K 8	80	著述	じいさん(自分をさして)
T 4	40	演劇	おばあちゃん(母親のこと)

誰かにとっての祖母である、母である、ということだけでなく、単に年老いた女性、中年の女性という意味で「おばあさん」「お母さん」のような言い方をすることがある。女性の調査の場合、特に老婦人を指して「おばあさん」「おばあちゃん」のように言った例が目立つことは既に述べたとおりである。

男性の場合には(表4)のとおり、このような語の用い方は比較的少ない。K 1の例は「煙草屋さんのおばあさん」「パン屋のおばさん」というふうに特定の女性について言ったもので、女性の調査でも見られた使い方である。K 7が用いているのは

(例10) ほんとにあの思い出すとね、ですから20年といえ一番最初の方ももちろん、お父ちゃん・お母ちゃんになってらっしゃる。

(例11) これからぐんぐん伸びて行く生徒学生は勿論のこと、おじいちゃん・おばあちゃんに至るまで、みなさんにね、この安来節の軽快なメロディー、えー、動作、えー、これを伝授したい。

という例で、特定の誰かを指すというより、子供を持つような年齢の人、老人という意味で概念として使っている。またK 8、およびT 4の例は、他者(子供や若者)から見て老人であるという自分や、自分の母をあらわしている。年令、性別的特徴を親族呼称にあてはめて呼ぶことは親しみの表現ではあっても尊敬されるべき存在として大切に扱われているとはいにくいということは既に女性における調査で指摘したとおりであるが、男性の場合これにあてはまるのはK 1の3例とK 7の「おじいちゃん・おばあちゃん」2ケース4例のみである。これにか

わって用いられているのは、「女性」(「中年の女性」「若い女性」「女性の方^{かた}」など)「女の人」「男性」「お年寄り」などで、これらは女性の場合と同じである。特異な例としてT5が、NHKのアナウンサーは皆地方局への配置をされるのかと問われ

(例12) そうですね、男の子はみんなそうですね。

と答えた例がある。これは若くはあっても成人の男性を指して言っている。企業で一般事務職の女性に対する(年齢にかかわらず)「女の子」という名称が問題になることが多いが、これはその男性版といえようか。これに類する例は昨年調査した女性の談話にも30才以下の話者で2例ほど見られた。

(例13) 私がいつも小説に書いたりしているのもまっ女の子が都会でどうやって生きていくのかがかなり大きなウエイトをしめていると思います。(30代作家)

(例14) 彼(自分の夫)はあの、他の男の子三人とアパートで……を借りて住んでまして、その隣に泥棒夫婦が住んでいたんです。(30代絵本作家)

③ 「～さん」「～さま」

a) 「みなさん」「お客さん」「お子さん」

(表5) 「みんな」「みなさん」

ケース	年代	職域	自分以外の人を指す場合	自分を含む場合
K3	50	作家	観光客みんな 若い連中みんな	
K6	60	元会社員	一級下のみなさん ヒットラーユーゲントのみなさん 専門(家)のみなさま 同い年の(全国の)みなさん	
K7	60	芸能	(会社の)みなさん 会場(観客)のみなさん (観客)のみなさん (一般のおおぜいの)みなさん×2	
T1	20	音楽	(自分以外のバンドの)みんな (学校の)みんな	
T2	20	スポーツ	(一緒にいる友人)みんな	全日本の選手とみんな
T3	20	タレント	(世話をしてくれた)みなさん×2	
T5	40	放送	(記者が)みんな、みなさん	
T6	40	出版	(日本人、チリ人)みんな	
T7	60	著述	(子供)みんな×3 (世の中の)みんな	
T9	60	演劇	(病院の)みんな	

自分以外の他者について「みなさん」を使っている例は数の上「みんな」とほぼ同数であるが、使用者がK 6、K 7、T 3のほぼ3人に限られていることがわかる。T 5にも1例あるが、これは

(例15) みんな、もう外、正規ルートをみなさん担当していますから記者の方とか、あすこだけ空いてるんですよ。

と、「みんな」を「みなさん」とあえて言い直した例といってよい。女性の場合、子供や若い人については「みなさん」より「みんな」を使う傾向が見られたが、男性の場合もそのことは同じように言えるとともに、全体的には「みんな」を選んでいる例が多いといってよい。但し、K 6では学生時代の友人やヒットラーエージェントの少年たちを「みなさん」と言ったり、「みなさま」と「さま」をつけた例もあり、この話者のことば選びの特徴——丁寧さを示している。K 7、T 3の場合は観客、世話になった人などへの尊敬として「みなさん」が選ばれている。

「お客さん」については、女性の場合、芸能関係者を中心に観客を「お客さま」と呼んでいる例が目立った。男性の場合全体で6例の「お客さん」と「お客さま」「お客」1例ずつが見られたが、演劇・音楽などに携っている人でも観客を「お客さま」とよんでいる例はない。「お客さま」「お客」は次のような形で現れている。

(例16) つまり(子供の遊び場を)区が作ってお客さまのように子供が遊ぶのではなく(T 4)

(例17) で、前はだいたい男性が(かつらの)お客さんだったんだけど、この頃は女性がねえ、いいお客になりそうだということです(K 7)
これらはいずれもある特定の人物を指して言っているのではなく一般概念として用いられている語である。

「お子さん」については「子供さん」も含め、女性に見られたように「さん」をつけて用いた例は全く見られなかった。子供について言及している例もあるがすべて「子供」「子」のような形で語られている。但し、これは、女性の場合のように特定の子供について語ることで自体が少ないことにもよる。男性が子供について語る場合、自分の子供のことや、自身の子供時代についての話題、また一般

的な話題として「現代の子供たち」について語るという例が多く、このような話題では女性の場合にも「お子さん」という言い方はなされないのが普通であった。

b) 職業・役職につく「さん」

(表6) 職業・役職・地位などをあらわすことば

ケース	年代	職業	「さん」		「さん」がつかない場合	
			特定の人をさす	概念としての職業	特定の人をさん	概念としての職業
K1	30	元教師 旅行	煙草屋さん		焼肉屋、先生方	
K2	40	画家			先生、天皇陛下	音楽家、画家
K3	50	著述	お巡りさん			
K6	60	元会社員			本屋、～教授 ～先生 テノールの歌手	
K7	60	芸能	社長さん			生徒、学生
K8	80	著述	本屋さん		事務局長、本屋 コレクター	コレクター アルバイト 図書館の事務の人
T1	20	音楽			ボーカル*、メンバー* 先生	
T2	20	スポーツ	兵隊さん		～監督、監督 コーチ 体操の選手 全日本の選手たち	召使い、上級生 役者、モデル 先輩*、レギュラー 監督、後輩* 体操の選手
T3	20	タレント	看護婦さん			小学生、スター 役者
T4	40	演劇			～先生、座長 役者	役者
T5	40	出版	博報堂さん* 電通さん* お巡りさん		新聞記者の方 雑誌の方、記者の方 博報堂*、NHK* TV朝日*、氏子	職人、袋物職人 サラリーマン アナウンサー
T6	40	出版			医師、社員 住職、大統領	管長、大宮司
T7	60	著述	メーカーさん*	王女様*	中学生、生徒 先生方、高校生	先生、課長、部長 重役、社長
T8	60	芸能	職人さん	お姫様*	先生 彫刻やっている人 デザイナー、老先生	ジブシー*、侍*
T9	60	演劇			マイクの人* 先生(医師) 声楽の先生	俳優 祈禱師 代役の人*
T10	60	演劇	兵隊さん		試験官、兵隊 課長、平(ひら) ～先生、先生 委員 お手伝いの女の方	幹部候補生* 通訳、試験官 演出家、俳優 女優、研究生補 助手

(注) *のついたものなど、厳密には職業・役職・地位とはいえないものもあるが便宜上、この項で整理する。

職業名に「さん」をつけて用いる言い方は男性の場合も女性に劣らず多い。話題がちがうことにより登場する職業もさまざまだから簡単に比較することはできないが、女性と共通に「さん」をつけて用いられた例があるのは「看護婦さん」「職人さん」の2語。「女優」は女性の場合には特定の人を指す場合にも、概念として言う場合にも「さん」をつけた例が見られたが、男性では「さん」のついていない例のみである。男性に目立つのは「本屋」「煙草屋」などの店名につけた「さん」や「電通」「博報堂」などの会社名につけたもの、さらに「メーカーさん」という言い方をしているものである。これらは女性の調査ではほとんど見られなかった言い方である。とくに「企業名+さん」や「メーカーさん」は企業組織などに属する人間が取引先であるとか、何らかの関係を持つものとして他の組織を意識するときの呼び方である。女性の調査ではほとんど見られなかったとは言っても、話題内容がそのような言い方を必要としなかったということも考えられ、女性がこのような言い方をしないとは、もちろん言えない。

概して「職業・役職などをあらわすことば」は、話者の性別、年代、職業やそれらを含めた個性によることば選び意識によるというよりは、用いられたことばのあらわす職業名による方が多いということは女性の調査において述べたとおりである。これは男性においてもかわらないといえる。「看護婦さん」「職人さん」もそうだが、その端的な例は「お巡りさん」で、これはこの語形でしか通常使われない。「あっ(お)巡りだ。逃げろ、」というような文形はなくはないが、インタビューのような談話で用いられることはまずないだろう。

ところでこの「お巡りさん」は男性に2例見られたが、女性には1例もなかった。「兵隊(さん)」も同様である。先にあげた「企業名+さん」や「メーカーさん」、また「社長」「部長」「重役」「社員」のような企業組織における地位をあらわす語も男性に多く、女性には見られない。これらの談話資料に登場する男性は必ずしも企業人ではない——むしろそうでない方がふつうである——が話題の選び方や、使用する語彙に関しては、やや乱暴な断定をすれば、企業・組織との結びつきが軍隊・警察なども含め、女性に比べて強いということはいえるかもしれない。現在までの男性と女性の置かれてきた社会の状況の違いが反映しているといっちは言いすぎだろうか。

④ 男性の自称

(表7) 男性の自称代名詞

20代						30代						40代					
ケ ー ス	わ た く し	わ た し	ぼ く	他	計	ケ ー ス	わ た く し	わ た し	ぼ く	他	計	ケ ー ス	わ た く し	わ た し	ぼ く	他	計
T1	0	0	3	2 ①②	5	K1	0	0	2	0	2	K2	0	0	6	0	6
T2	0	0	3	0	3							T4	2	1	14	3 ②	20
T3	0	0	13	0	13							T5	2	0	13	0	15
												T6	6	9	0	0	15
平均 (%)	0 (0)	0 (0)	6.3 (90)	0.7 (10)	7.0		0 (0)	0 (0)	2 (100)	0 (0)	2		2.5 (17.7)	2.5 (17.7)	8.3 (58.9)	0.8 (5.7)	14.1

50代						60代～					
ケ ー ス	わ た く し	わ た し	ぼ く	他	計	ケ ー ス	わ た く し	わ た し	ぼ く	他	計
K3	0	0	13	0	13	K6	0	15	0	1 ③	16
K4	0	0	2	2 ③	4	K7	0	0	9	1 ③	10
K5	0	1	0	0	1	K8	0	8	1	0	9
						T7	0	2	4	0	6
						T8	1	1	3	0	5
						T9	0	0	7	0	7
						T10	0	0	11	0	11
	0 (0)	0.3 (5.0)	5.0 (83.3)	0.7 (11.7)	6.0		0.14 (1.5)	3.7 (40.7)	5.0 (54.9)	0.28 (3.1)	9.1

(注)

・その他について

① 自分

② おれ

③ われわれ

・表にはそれぞれの自称および「わたしども」「ぼくら」のように自分を含めた複数の人を示すことばをも含めた。

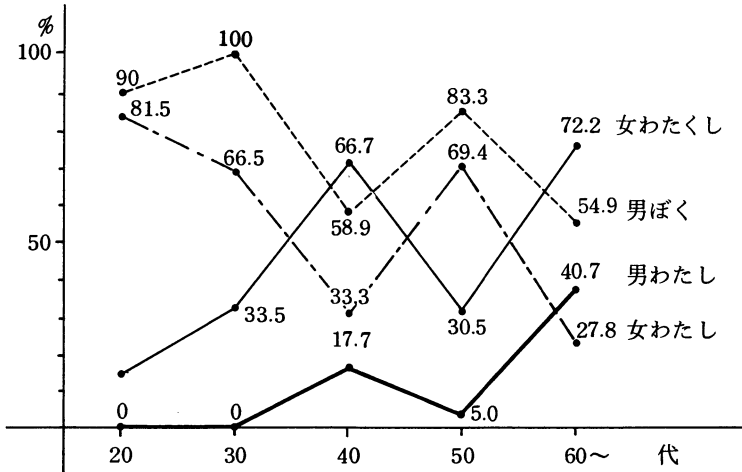
・①「自分」は

「自分なんか基本的にはハードロックとか聞いてる時間が多かったんですけど…」(T1)

という例。

「自分で～する」というように「ぼく」「わたし」でおきかえられない例はこの表には含まなかった。

(図2) 年代による自称の推移



共通語における女性の自称が「わたし」「わたくし」（くだけた形としての「あたし」「あたくし」を含む）にほぼ限られるのに対して、男性の場合、これに加え「ぼく」「おれ」など男性固有の自称代名詞があり、また「自分」などと称することもあって多様である。本調査にもそれは現れており、ケースT4のように4種の自称——「わたし」の中には「あたし」とはっきり言い分けているものもあり、それを別にすれば5種になる——を駆使している例も見られる。

(例18) たしか僕が売れた時ってのは化粧した顔と素颜ってな、ほんとに違いましたから、どこ行ってもわたくしはばかにされました。はっきりゆって…

(例19) おれはすごい役者だと思った。

(例20) あたし隣にいるような女ですから…

のように、女形の役者であり、同時にひげ面の三枚目も演じるという役者としてのさまざまな側面、そして地の自分と使いわけを自由に行っている。

ただ全体的に言えば、このようなインタビューにおける談話での自称は、

「ぼく」「わたし」の使用が中心であり、中でも「ぼく」が年代を問わず優勢である。また、女性のような頻度で「わたくし」が現れることはない。「おれ」も発現数は2話者4例と少ないが、これは一応公けの場としてのTV、ラジオの

インタビューということとで、ただけた表現である「おれ」の使用がさしひかえられた面もあると考えられよう。

(図2)を見ると、男性における「ぼく」と女性における「わたし」、男性の「わたし」と女性の「わたくし」がちょうど対応する形で、前2つは年代が上がるにつれて減り、後2つは年代が上がるにつれて増えていくというようすが見てとれる。女性の場合40代の話者が1名のみで、このケースが比較的「わたくし」を多く使っているということもあり、40代と50代の「わたし」「わたくし」は逆転しているが、全体の傾向としては年代が上がるにつれて「わたし」が減り「わたくし」が増えるとは言ってよいだろう。男性の場合でいえば、「ぼく」が減り「わたし」が増えていく。ただこの変化の内容は男性と女性ではその様相を異にするように思われる。

女性の場合、「わたし」のよりあらたまった形として「わたくし」が用いられると考えられるが、この「あらたまり」の意識は、多くの場合、基本的な自称としての「わたし」の上にダブリおおいかぶさる形で出現する。「わたくし」のみを自称として用いる女性は22人中、30代後半以上の年代の3人にすぎず、他の人々は「わたし」だけを用いるか、「わたし」と「わたくし」を混じえ、しかもその割合は、9:5、13:18、3:5…というふうにあまり偏りなくどちらも使う——すなわち談話の状況に応じて選択されていることがわかる。「わたくし」を用いた例のない30代前半の6ケースを除けば、他のすべての年代の「わたくし」の使用者にこのことは言える。

一方、男性の場合、(表7)に見られるように、年代が上がるにつれ、「わたし」のみ、もしくは「わたし」中心で話すケースの数は増えていくが、あいかわらず「ぼく」を用いて話すケースでは「わたし」の使用が増えるわけではない。「ぼく」と「わたし」を混えているケースでもその割合は14:1(T4)1:8(K8)3:1(T8)のようにどちらかに傾いている例が多い。これは「ぼく」と「わたし」が談話の状況に応じて選択されているのでなく、話者の別によって選択されていることを示す。すなわち、男性の方が、インタビューというひとまとまりの談話の中での1つの自称を用いて通し、女性のような揺れは少ないといえる。

とはいえ、男性が談話の状況に応じた自称の選択を全くしないということではもちろんないだろう。「ぼく」中心とはいいながらT4は4つの自称を使い分けしているし、T2、T8のように「わたくし」というさらにあらたまった語形を使用している例もある。また「おれ」の使用が少ないことからみて、話者がインタビューという場全体を一つの談話状況と見てその中での語選択を行っていると考えられるのも前述の通りである。日常生活の場で「おれ」を用いる男性の談話をきくことは多いし、また会議の席上などで、20代30代の人々が「わたし」を用いて話すことも（この調査の結果に比しても）多い印象がある。そしてこのように考えてみると、相手と自分との関係やその場の状況に応じて選ばれるという日本語の自称の特性も、その場や関係のとらえ方というところでは、男性・女性の間にはズレがあるといえる。幼い少年は、多くの場合「ぼく」と自称することからはじめ、成長にしたがって、「おれ」を使う仲間うち、「わたし」で話す場と生活を広げ、同時に多様な自称をその場に応じて用いるようになっていく。一方、女性の場合は幼少時より「わたし」を用い、それは大人になってさまざまな暮しの場や他者との関係を得ても、場に合わせて自称を変えていく必要のないものとして最初からある。（女性にとって「わたくし」を使う必要性は、男性にとっての「わたし」と比べれば、ずっと低いのではないか。）これは近代の早い時期から公私を分ける必要のある、そのような生活の場を持っていた男性と、公の場での発言の機会を得るについては後進であった女性の立場の差が自称の上に現れた、とも言い得るかもしれない。しかし、絶対的な自称詞を持つが故に対者との関係や場にとられずに自己を絶対的なものとして認識することもできるのではないか。ケースT4のような多様なことばの駆使は日本語の豊かさでもあり、一つの魅力をかもし出しているといえよう。しかしそれはやはり特異な個性の上に効果を発揮するものであり、一般的な談話ではまず自分の意志、立場を論理的に相手に伝え得ることをもって一義とする。その意味で、絶対自称ともいえる女性の「わたし」、特にこれのみを用い「わたくし」を混えない30代前半の女性のことばの論理と歯切れのよさこそは、日本語の談話のあり方の一つの方向を示しているともいえよう。

ま と め

一般に女性のことは男性より丁寧であるといわれる。本調査においても「お」「ご」の使用、「お客さま」「みなさま」などの語の用いられ方などについては女性の方が男性よりも丁寧度は高いという数値が出ている。

しかしそれにも増して言えるのは、名詞の場合、特に男女差のみならずさまざまな要因がその語選択にかかわっているということだろう。特に年配の女性に多く見られた「お」「ご」の使用についても、話題によってはケースT3に見られたように若い男性にも多用されている場合がある。男性に対しては配偶者や子供のことがあまり話題にならず、女性に対してはそれが話題の一つの中心にされるというような、社会的な男女のありようが使用される語彙の差として現れる場合もある。また男女にかかわらず、その人の属する職域、それにまつわる話題によって決定される語彙もある。自称に関していえば女性の「わたし」と男性の「わたし」——同じ語ではあってもその丁寧度を同一としてはかることはできない。「わたくし」についても同様である。

それらの要因のからみあいの中で、男性の場合も女性の場合も非常に広い範囲に丁寧度が分布しているという印象がある。女性の最も丁寧な部分はどの男性よりも丁寧であるとはいえても、女性全員が男性全員より丁寧であるということでは決してない。特に女性の調査の場合50代以上、また女優、歌手など芸能関係の人の一部にややきわ立った「お」「ご」の使用、「～さま」の使用、また自称「わたくし」などが見られたが、30代の女性などにはこのような傾向はほとんどなく、男性の場合と数値的に近いものを示している。また男性の場合は調査資料が2種類のインタビュー番組であることなども影響し、話題が女性に比して多様である——女性の場合、ほとんどはゲストの仕事と家族が話題の中心だが、男性の場合、仕事あり、仕事を離れたいわば趣味の話あり、若い頃の思い出話あり、社会問題への考察あり……——こともあってか、年代的、職業的な傾向はほとんど見られず個人差としての語選択の傾向があらわれている。そしてそれらのトータルに近いところを示しているのが30代、特に前半の女性の名詞であるといえる。女性のこの世代はまた、夫をあらわす「主人」を用いないこと、「わたくし」を用いないことなどにおいて、意識的に旧来の女性らしいことばを

離れようとしていることは昨年の調査で指摘したとおりである。昨年、名詞の場合、述語部分などに比較すれば話し手によっては旧来的な丁寧さを残している部分もありはするが、性差のないことばへの方向への移向はここでも確実にすすんでいるとしたが、男性との比較によってもそのことははっきりと言ってよいと思う。